

ジャン・ブリューン人文地理学の方法 : ポール・ ヴィダル＝ド＝ラ＝ブラーシュとの比較において

野澤, 秀樹

<https://doi.org/10.15017/2230276>

出版情報 : 史淵. 127, pp.29-66, 1990-03-31. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

ジャン・ブリューン人文地理学の方法

——ポール・ヴィダル＝ド＝ラ＝ブラーシュ

との比較において——

野 澤 秀 樹

“毎週月曜日の夕方5時、人文地理学の講義が行なわれるコレージュ・ド・フランスの第8講義室の入口には講義を聴こうとする人たちが列をなしていた。先生の威光をもって、きりっとした小刻みな歩き方で、素速く、時間通りに講義室に着くと、彼はまず周囲に掛けられた地図類に一瞥して確かめ、ついで聴衆にじっと目をやるのである。その奥深い目差しは先生と聴衆との間にある観念の結びつきを示すものであった。それはまた善良さと繊細さ、現実主義の熱意を伴った信頼の雰囲気を生み出す目差しでもあった” (Deffontaines, 1939, 16)。

I 問題の所在

ジャン・ブリューン (1869—1930) は高等師範学校時代ポール・ヴィダル＝ド＝ラ＝ブラーシュ (以下ヴィダルと略記) から地理学に対する啓示を得て、地理学の道を歩むことになった (Lefèvre, 1929, 47)。はやくから乾燥地域に関心を示し (Brunhes, 1894-5, 1897a,) イベリア半島, 北アフリカの灌漑に関する人文地理学的研究で学位を取得する (Brunhes, 1902a)。この研究は、後に取り上げるロビック (Robic, 1988) の最近の研究まで余り注意を払われて来なかったが、彼の思想を知る上で注目すべきものであり (J.-Brunhes De-

lamarre, 1975, 58), その後のブリューンの地理学全体が凝縮されているとも言える。この学位論文はヴィダル時代の学位論文としてはもっとも初期のものであるが¹⁾, その後に現われるいわゆるヴィダル派の学位論文とは傾向を異にするもので、ここにすでにわれわれはヴィダルとの違いを垣間見るのであるが、詳しい検討は本論に譲ろう。

彼の名が広く知られるようになったのは大著『人文地理学』(1910a)の出版とコレージュ・ド・フランス教授の座を射止めた(1912)ことによってであろう。とりわけ彼の『人文地理学』はフランスにおける初めての人文地理学の体系的な書物であり(Martonne, 1930), アメリカのイザヤ・ボーマンの目にとまり, 英訳(1920b)されて広く流布し, ブリューンの名と共にフランス(学派)の地理学が知られるようになった。フランス以外の国においては, 彼の師であり, フランス学派の祖であるヴィダルより先にその名が知られ学派を代表する人物とみられていた。これらの国々では学祖ヴィダルの存在が明らかになった後にも, ヴィダルと並んでフランス学派の成立を担った双壁とみられてきた(Taylor, 1951; Dickinson, 1969)。しかるに, フランスにおけるブリューンに対する見方はどうもそうではなかったらしい。ヴィダルの直弟子をもって任じていたヴィダル派(ソルボンヌ)とブリューンを取巻いていた人々(コレージュ・ド・フランス)の間にはある種のぎくしゃくしたものがあつたらしい²⁾。師に先駆け人文地理学の体系書を著わし, コレージュ・ド・フランス教授という最高の榮譽を担い, 華々しく活躍するブリューンにやっかみめいた感情があつたのであろうか。師ヴィダルをカリスマ³⁾と仰ぐヴィダル派にとっては, ブリューンが師の人文地理学を継承し, 発展させたことに對して, 面白くない感情を抱いていたのであろう。しかし, われわれはここで感情的とも思われるこの対立を詮索しようというのではない。ただ, このような下世話めいたことを話題にするのは, これまで少なくともフランス本国において, ブリューンが正当に評価されてきたように思われぬのはこのような事情があつたからではないかと想像するからである。さらにまた, ブリューンの地理学が(学派として)継承されなかつたのは, 彼のいたコレージュ・ド・フランスが

研究者を養成する機関ではないことによるとしても、彼を師として取り巻いていた優れた地理学者が必ずしも恵まれたポストをえなかったことも上の対立と係わっているのではないかと考えられるからである⁴⁾ この問題は学派形成に関する contextual approach のテーマとなるものであるが、ここではそれを試みようとするのではない。ブリュンの地理学をそうした感情を離れて（少なくともわれわれはそのような態度をとることができる）正当に評価してみようと思うのである。ブリュンの地理学理論を正当に評価するには必ずしも上のような事情を踏まえなくとも可能であろう。

フランスにおいてブリュンの評価をある意味で決定的にしたのは例のフェーヴル (Febvre, 1922) の『大地と人類の進化』であった。フェーヴルはそこにおいて、デュルケーム派が批判するラッツェル地理学を退け、ヴィダル派地理学を高く評価するのであるが、広い意味ではヴィダル派に属するブリュン一派をラッツェル地理学の亜流あるいはデュルケーム派に近い存在としてと見做しているのである。ブリュンはフェーヴルの書が出た時それを時期を逸したものと軽く受け流したものの (Brunhes, 1925b, 71), フェーヴルの自分に対する誤った評価がそのまま受取られることを恐れていた (J.-Brunhes Delamarre, 1975)。ブリュンはラッツェルを深く研究し、彼の地理学を乗り越え、発展させようとしたのであり (Brunhes, 1904a, 1925 a, 1925b ; Vallaux, 1930), ブリュンをフェーヴルのように単に地理的決定論の観点からラッツェルの亜流とみるのは、後述することからも誤りであろう。フェーヴルのようにブリュンを見てしまっただけでは彼の努力を全く水泡に帰してしまうことになる⁵⁾。ブリュンの人文地理学の体系化の試み (『人文地理学』1910) が、フランスにおいて扱われるべきものがなく、ただラッツェルの『人類地理学』のみが存在していた当時では、ラッツェルを学びとることは当然であったであろう。

ブリュンをラッツェリアンとするフェーヴルの見方や『地理学年報』に計報論文を寄せたマルトンヌ (Martonne, 1930) が、ブリュンの業績 (『人文地理学』) やコレージュ・ド・フランスへの就任を皮肉っぽく書いている (橋本, 1971および注2)参照) のは別にして、戦後のフランスを中心にしてブリー

ンが地理学史的にどのように評価されてきたかを一瞥しておこう。

フランスにおける最初の体系的な人文地理学史をまとめたクラヴァル(Claval, 1964/1976)はブリューンがラッツェルの影響を強く受け、その下になされた分類は人工的なところがあり、彼の『人文地理学』はその主眼点であった素材を整理しようとした論理的枠組みより素材の膨大さによって重視されたこと、さらに彼の地理学がアングロ・サクソン諸国を中心に広まったことを指摘している。これなどは従来通りの見解をそのまま繰返している⁶⁾。またヴィダル派の系譜をひくメイニエはマルトンの見解をそのまま継承し、ブリューンの景観の形態研究を評価するに過ぎない(Meynier, 1969, 67-68)。いずれもブリューンの地理学の全体に渡って検討され評価がなされているわけではない。

70年代以降地理学史研究が本格化、多様化していく中でブリューンの再評価が不十分ながら試みられていく。フランス人によるものではないがフランス地理学の流れを社会地理学という系譜において研究したアン・バッティマー(Buttimer, 1971)はブリューンに1章を割き、彼が師を継承しつつ、系統的アプローチと応用地理学の面で先駆者となり、彼独自の地理学の方法を模索したことを明らかにしている。そこにはベルクソン、ル・プレー学派との交わり、ラスキン思想への共感などが深く刻み込まれているという⁷⁾。また歴史的なコンテキストの中においてフランス地理学派の形成を問題としたヴァンサン・ベルドゥレー(Berdoulay, 1981)も、ブリューンが左派カトリシズムやル・プレー派の流れを汲む社会学派との繋がりが深く、ヴィダル派とは異なったサークルにあったことを明らかにしている。地理学認識論上の問題を学史的に検討したニコラ・オバディア(Nicolas-Obadia, 1984)は、ブリューンが主体である地理学者と客体である地理的なものとの間の認識論を問題としていたこと、また上のベルドゥレーとともにブリューンの統計、確率に対する関心が彼の科学論・認識論と係わることを指摘している。こうしてブリューンの地理学論が本格的に検討されるようになった。

わが国においては小寺廉吉がブリューンに師事し、晩年にあたる1926—28にかけて、コレージュ・ド・フランスで彼の講義を聴講している(小寺, 1931)。

また小寺とほぼ重なる時期にフランスに留学していた京都大学の小牧実繁(1927—29年まで3ケ年間)はソルボンヌのマルトンヌなどに師事していたようであるが⁸⁾、ブリューンらの地理学、とくにヴァローの歴史地理学に強い関心を示している(小牧, 1926)。彼らはいづれもブリューンの訃報に接し、マルトンヌの訃報論文を参照しながらブリューンの人となりと業績を紹介している(小寺, 1931; 小牧, 1931)。また戦前わが国において、地理学の小田内通敏や民家研究家の今和次郎らのグループはブリューンの民家の研究を輪読し、わが国の研究に生かそうとしていたという⁹⁾。なお英訳本からの抄訳であるが松尾俊郎によって『人文地理学』の邦訳が出され(Brunhes, 1929)、わが国にもはやくからその名を知られていた。

わが国において、本格的にブリューンの地理学論が問題にされたのはヴィダルの紹介につとめてきた飯塚浩二(飯塚, 1950)によるものが最初であろう。飯塚にはフェーヴルの影響が強く見られるのであるが、かれはブリューン地理学方法論上鍵となる「心理的事実」を批判点に取り上げ、それが地理学を「相対主義」に陥しめるものとして論難している。この飯塚の見解以後わが国では長い間ブリューンが取り上げられることはなかったが、20年を経過して漸く橋本征治は飯塚のいう「ブリューンの心理相対主義」を再検討し、「ブリューン人文地理学の体系と方法」を問題にしている(橋本, 1971)。橋本の研究はブリューンの地理学を体系論とそれを支える方法論と関連づけて明らかにしようとし、とくに「心理的要素」について深く追究した労作であるが、その問題点は後に検討されよう。

ところで近年精力的にフランス地理学史に取り組んでいるマリー・ロビックはブリューンの学位論文『灌漑』の中にローカルな対象の中に根を降ろした「比較方法」と「実践的地理学者」の2つの点を読み取り、これらの点でブリューンがヴィダル派の中の「異端」であるという(Robic, 1988)。ロビックは「異端」ということを理解し、上の2つの関係を解き明かすためにブリューンの家族環境、自然学者、実証主義者、カトリック教徒としての彼の側面を検討している。このこと自体は上述したようにバッチェマーがすでに関説している

ことであるが、ロビックによると、ブリュンにおいて「水と島」が（学位論文のみならず生涯を通じて）かれの地理学のテーマとされてきたのは、定着（fix）と流動（fluide）という二元性に対するブリュンの関心の隠喩がそこに存在するのだという。

以上のような問題状況に鑑み、ブリュン地理学にはどのような特徴があるのか、改めて残された作品を通して彼の地理学の全体像（思想）を明らかにしフランス学派の中にどのように位置付けられるかを検討してみたい。その場合、我々は常に学祖ヴィダルを念頭に置きつつ、ブリュンが師のそれを継承した点、そして彼がそれを発展させ、展開した点、さらに師とは異なった独自の点を明確にするように努めたい。フランス学派全体におけるブリュンの位置付けは他の地理学者の検討をまっけて行なうことが可能になるのであり、そのための準備の研究である。しかしひとつの独立した研究でもある。

II ブリュン地理学の原理と対象

1. 原理

周知のようにヴィダルは地理学の課題を「人間と自然（環境）の関係」におき、それを「地的統一」理念の具象化である「地表上の諸現象の繋がり」において捉えんとした。具体的にはそれは個々の土地を舞台にローカルな環境と普遍的な環境との関係において織りなされる歴史的な人間の営為としての「生活様式」として把握されるものであった。ブリュンにはやくも1897b年の論文において師ヴィダルの「諸現象の繋がり」という地理学の研究対象を獲得し、地理学は「地表面で作用している諸力、……それをお互に結びつけている関係において研究すること」であるとし、科学的な現代地理学は2つの主要理念（idées）に支配されているという（Brunhes, 1897b, 24）。一つは「活動性」（activité）の理念であり、今一つは「結合性」（connéxité）のそれである。前者は上述の諸力の作用であるが、後に「労働」として把握されるもので、自然と人間との関係を取り結び、生み出す力である。後者は言うまでもなく、諸力の

作用＝活動を繋がり＝関係（結合）においてみようとするものである。

ヴィダルにおいては地理学の対象性とその原理が「諸現象の繋がり」という全体論的な観念によって表現されていたが、ブリューンはそれを「活動性」と「結合性」に分析的にわけてヴィダルの概念を明確にしている。そして地表面で作用している諸力がまず研究されなければならないとし、「活動性」の理念と事実を前面に置いたのである。活動（性）の具体的な内容については後に詳しく見ることになる。また一方「結合性」とは上記諸力の地表における統一を生み出す原理であり、フンボルトの相観（Physionomik）やヴィダルの『アトラス』にみられる「結合」（liason）と同一の観念である。これが他の科学の中にあって地理学を特徴づけるものとなるというブリューンの主張はヴィダルのものである。このようにしてブリューンはヴィダルと同じように地名や産物を並べ立てる旧来の「土地の記述」としての地理学から地表の諸現象を比較し、分類し、さらに説明を試みる現代的な科学的な地理学を目指さんとしたのである。そこから地理学は一つの歴史学（une histoire）であり、一つの体系（un système）であるというブリューンの主張がなされたのである（Brunhes, 1897b, 24）。

この統一（unité）と関係（rapport）の観念から、ブリューンは進化論的思考による地表の説明の可能性を示唆する。すなわち、物質的諸現象にも発生、成熟、衰退（老化）があることから、物質的事実を有機的発展として理解し、大地の形態の進化の法則を打ち立てることができるであろうという（Brunhes, 1897b, 28）。このような有機体的思考は物質的事実のレヴェルに限らず、上位の複合性（complexité）をもつ地理的事実、たとえばある地域の人間の居住や都市中心の発展なども生物のもつ特徴を示すのである（Brunhes, 1897b, 32）。問題はこうした地理的事実が生物のように誕生し、成長し、衰退していく原因が何かということである。これが活動性の理念と事実がまず取り上げられる理由であり、地理学の第一の、大きな章をなすことになる。そしてその研究に当たっては現象のさまざまな系列を孤立して扱うのでは十分でなく、ヴィダルのいうように現実にみられるようにそれぞれの繋がりにおいて捉えることであ

る。これが上で述べた結合性であり、ブリュンはヴィダルにならってここに諸科学のなかの地理学の独自性をみている (Brunhes, 1897b, 35)。ブリュンはそれをさらに積極的に進め、「外観的には非常に異なりまた孤立していて、本質的には偶然的なものとして現れている2つの現象を必然的關係によって結びつけることはひとつの真の説明であり、この意味で地理学は現実に土地の一般的説明である」(Brunhes, 1897b, 243) ことを強調する。

2. 人文地理的事実の分類とその系列

以上のように地理学の原理が示されたあと、次に取りかかるべきは「活動性」の事実の提示であろう。これはブリュンの人文地理学の業績上よく知られた人文地理的事実の分類である。この分類がはじめて提示されたのは大著『人文地理学』が著わされる数年前の論文においてである (Brunhes, 1906a)。この論文は『人文地理学』の体系の骨格を示したもので、その考え方はほぼそのまま『人文地理学』にも継承されている。『人文地理学』の副題に人文地理学の実証的分類と名うたれているのがそれである。そこにおいて彼は例の人間生活に不可欠な食物から始まる人文地理学の本質的実証的な事実を4つの系列あるいは段階に分けて提示している (Brunhes, 1906a, 551-555)。

第1の系列(段階)は自然的欲求 (besoins) を満足させるもので、衣・食・住のいわゆる経済地理学の3つの本質的基礎となるものである。

第2系列(段階)は人間生活において第一に必要な物質を満足させるものであり、多少とも遠い将来を視野に入れた労働 (travail) に基づく (commande) 事実である。地表におけるこの現象は土地の開発であり、農業地理学 (géographie culturelle)、牧畜地理学 (géographie pastorale)、工業地理学 (géographie industrielle) という一般的名称の下にまとめられる。人文地理学より複雑な第2段階に対応する。

第3の系列(段階)は地表において集団として生活している人間存在にかかわる事実である。地表のさまざま地点に人間が存在していることから生じて来る最も単純な事実としての交換 (échanges)、また土地 (開発) 経営の労働

(travail) に結びつく所有様式（集団的あるいは集会的）は社会的事実としてこの系列に位置付けられる（Brunhes, 1925a, 55）。従ってこの系列の問題を扱う地理学をブリュンは「社会地理学」と呼んでいる（Brunhes, 1906a, 556）。

第4の系列（段階）は第3の系列で問題とされた人間集団の共存に基づく事実である。すなわち集団間の関係の問題である。この問題を扱う地理学をブリュンは「歴史地理学 géographie historique」という彼独特の名称を与えている。一般に政治地理、軍事地理、行政地理と呼ばれるものである。この系列に属する問題は後にブリュン地理学の重要なテーマになるが、1906a年の論文が書かれた段階ではまだ十分な検討がなされているわけではなく、地理的な条件との係わりが指摘されているに過ぎない（Brunhes, 1906a, 555）。

このようにブリュンによって人文地理学の本質的事実は人間の生存にとって自然的欲求である基本的地理的事実から社会、政治、経済的關係に至る高度な地理的事実まで「増大する複合性 complexité の順序」によって4系列ないしは4段階に分類され（Brunhes, 1925a, 47）、それぞれ1) 生存のための基本地理学（Géographie élémentaire des premières nécessités vitales, 2) 土地開発の地理学 Géographie de l'exploitation de la terre, 3) 社会地理学 Géographie sociale, 4) 歴史・政治地理学 Géographie historique et politique と命名されたのである。そして人間社会の進化において地理学的説明が有効性を発揮するのは第2系列や第3系列の事実においてであろうという（Brunhes, 1906b, 556）。しかし最終的にはこれら諸事実相互のグローバルな関係も問題にされねばならず、さらに地理学の最高位の段階であるところのヴィダルという「全体の地理学 géographie du tout」に至らなければならないとされる（Brunhes, 1906a, 557）。

ブリュンは上にみたように人文地理学の本質的事実について抽象的に4つの段階に分けて説明したが、それらを具体的に研究するにあたってより具体的な事実として、次の3つのグループに分け、6つのタイプ（典型的例）を提示している。

第1のグループは、ブリューンが「土地の非生産的占拠」(1906a, 1910a)、後に「不毛的占拠 occupation stérile」(1913a)と呼ぶところの2つの本質的人間事象(事実)、すなわち a) 家屋、b) 道路で、後に触れるように彼が最も研究に力を入れた地理的事実(分野)の一つである。第2のグループは「動・植物的征服」(1906a, 1910a)、のちに「生産的占拠 occupation productive」(1913a)と呼ばれた c) 畑と菜園、d) 飼育獣と牽引獣である。第3グループは「破壊的経済 économie destructive」(ドイツにおける Raubwirtschaft) (1906a, 1910a)あるいは「破壊的占拠 occupation destructive」(1913a)と呼ばれ、e) 碎石場、f) 鉱山がそれである。

これらの3つのグループの地理的・発生的あるいは歴史的・時間的性格をみると、「破壊的経済」(「破壊的占拠」)は一般に、地球上のある点における人間の居住の第一歩であり、「動・植物的征服」(「生産的占拠」)は人間生活の永遠の条件であり、「不毛的あるいは非生産的占拠」は最終段階であり、人間活動の最も安定し、かつもっとも特徴的な顯示であるという(Brunhes, 1913a, 14)。

ブリューンは最初の赴任地であるスイス・フリブール時代に書かれた2つの論文(1897b, 1906a)や大著『人文地理学』(1910a)によって、人文地理学の対象、課題、方法を明確にしたが、それらはいずれの学的生涯の後半生の間となるコレージュ・ド・フランスにおいて着々と達成されていく。コレージュ・ド・フランスでのかれの仕事は大きく2つの分野に分けられるであろう。そのひとつはかれが1906a年の論文で「生存のための基本地理学」および「土地開発の地理学」とよんだところの人文地理学のうち主として広い意味の経済地理学の課題で、第1—2系列に属する問題である。それについてはピエール・ドフォンテーヌの協力を得てガブリエル・アノトゥー編集するところの『フランス国家史』叢書の初巻を飾る『フランスの人文地理』¹⁰⁾(Brunhes, 1920a, 1926)に結実する。いまひとつはかれの人文地理学の課題の残された分野である第3—4系列に属する「社会地理学」および「政治地理学」を中心とした『歴史の地理学』(Brunhes, 1921)である。この2つの分野の内容を章を改め簡単に紹介しておこう。

Ⅲ 人文地理学と歴史の地理学

1. 人文地理学—家屋および労働の地理学

ブリューンは先に提示した人文地理学の本質的事実について『人文地理学』の中で、それぞれ章に分け、具体的に論じている。それらをさらに『フランスの人文地理』ではフランスをフィールドとしたかたちで詳細に検討している。ここではそれらを逐一紹介する余裕はないので、ブリューン地理学において特徴的な、そして世界の人文地理学界に影響を与えた問題について若干取り上げることしよう。

1) 家屋

家屋はブリューンによる人文地理学の本質的事実のうち、人間の自然的欲求に基づくものであり、第1系列に属している。ヴィダルが『人文地理学原理』の中で述べているように、家屋は個々独立したものではあるが、それらが集合としてそれぞれ地域的な類型を形成するところに地理学的な意味をもつのである。ブリューンはそのことを簡潔に次のように要約している。「村落類型はそれ自身地理的事実である。一地域の性質を表わす地理的事実であり、それを直接取囲むものと相観および位置との関係とによる地理的事実である」(Brunhes, 1925a, 143)。このようにブリューンは『人文地理学』において、「家屋」がもっとも明白な人間活動の本質であり、村落類型は真の「地理的精神」を反映するものであるという¹¹⁾。

ブリューンは以上の考えに基づき、『フランスの人文地理』においては地域の側面、すなわち家屋や村落の地域類型に焦点を絞っている。この家屋の地域類型以上にフランスの「プロヴァンス」や「ペイ」の基本的示差的現実を示すものはないといわれる。彼は屋根のかたちと材料によって次のような地域的2類型を設定し、図示した(図1)。1) 北部と西部→とがった、急傾斜、スレートぶき、平瓦、藁、石や木材での押え。2) 南部→低い、傾斜の緩やかな、切り妻、寄せ棟、丸瓦。この明瞭な家屋と屋根の類型を説明してくれるものとし

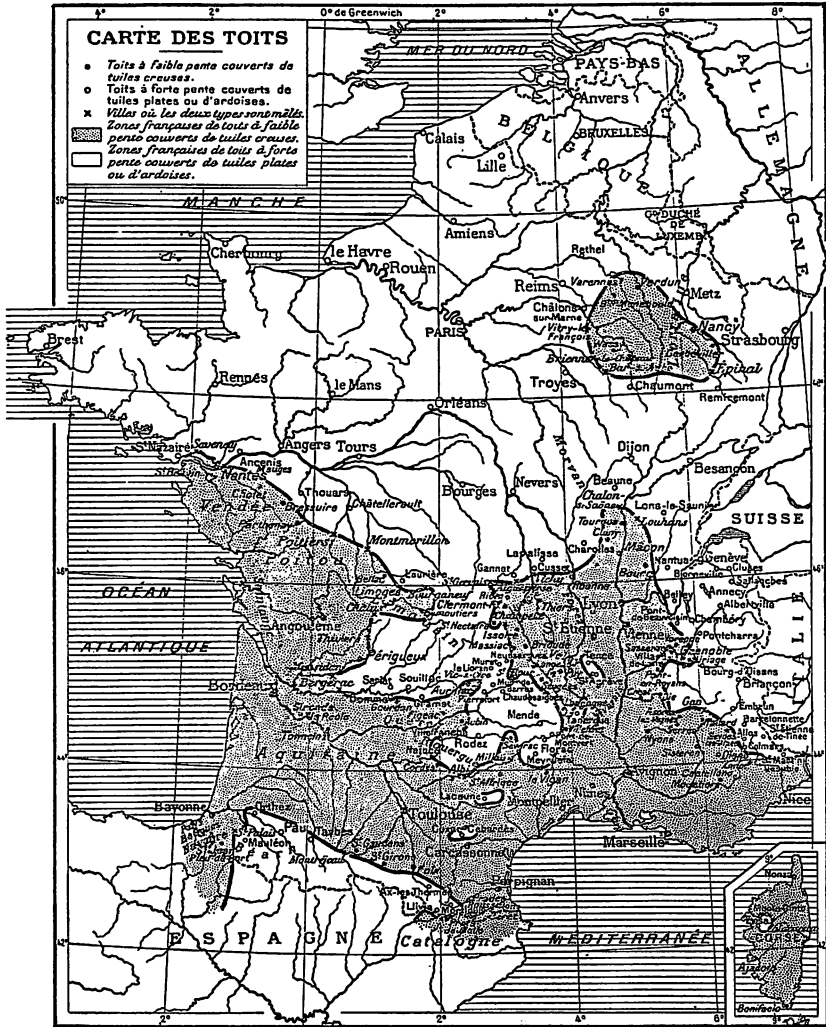


図1 フランスにおける家屋類型 アミ目地域——屋根の勾配緩やか、円瓦葺
 その他地域——屋根の勾配急 平瓦、スレート葺

て、第1に気候因子、第2に歴史性を上げている¹²⁾ (Brunhes, 1920a, 438-9)。

ところで、家屋、村落の類型についてはドゥマンジョンとの間に意見の相違があったことが知られている (Berdoulay, 1981; J.-Brunhes Delamarre, 1975; Vallaux 1921)。ドゥマンジョンについては別稿で取上げるが、簡単に両者の相違を述べておけば、ブリューンの家屋あるいは村落の類型論は上に触れたように、屋根の傾斜やかたち、その材質など主に「外部形態」を重視するところに特徴がある。それに対してドゥマンジョンは「形態」より「機能」を重視し、農家の機能を統一的に示しているといわれる「プラン」によって類型化を行なっている。

このような建築物の外面形態＝建築様式による地理的広がりについて教会、鐘楼などについても検討を行なっており、また農業用の車の類型¹³⁾ の指摘も内容は次節で取り上げる労働と結びついたものであるが、この系統の仕事であろう。

2) 労働

ブリューンは地理学の基本的理念として「活動性」と「結合性」を提示したが、前者は労働と置き換えることのできるものである。それはとくに彼が第2系列に位置付けた事実で、人間が将来の生活の維持を見越して行なう意識的活動である。その具体的内容については『人文地理学』第1巻および『フランスの人文地理』の第4部で果たされている。とくに後者は「労働の地理学」と題されている。この部分は実はブリューン自身が執筆したものではなく、ブリューン地理学に心酔し、その弟子といってもよく、またよき協力者でもあったピエール・ドフォンテーヌが担当している。地理学の課題である自然－人間関係を労働として把握しようとしたのはもともとブリューン自身であり、彼の指導下に書かれたこの部分は両者の共同著作ともいってよいであろう。従ってここではブリューン地理学の問題として検討しておきたい。

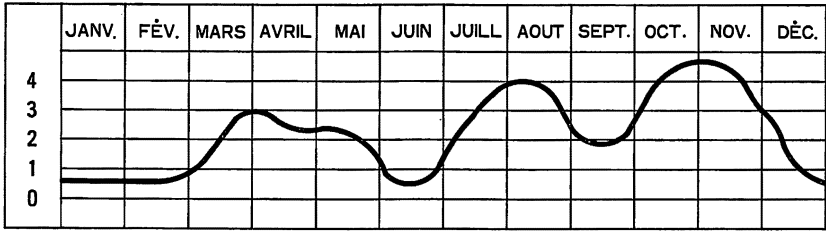
「労働」という概念はブリューンにとってきわめて重要な概念である。これはかれの宗教的信条とも係わるものであり、ローマ法王庁が始めて労働者の諸問題を取り扱ったといわれるレオ13世の回勅『レールム・ノヴァール』(1891)

に触発され¹⁴⁾若い時から兄と、結婚してからは夫人とともに社会活動を行っていた。労働の観点から地理学を捉えていたエリゼ・ルクリュについて論評しているのもそのこと（労働）の関心の深さを示していよう（Brunhes, 1906b）。

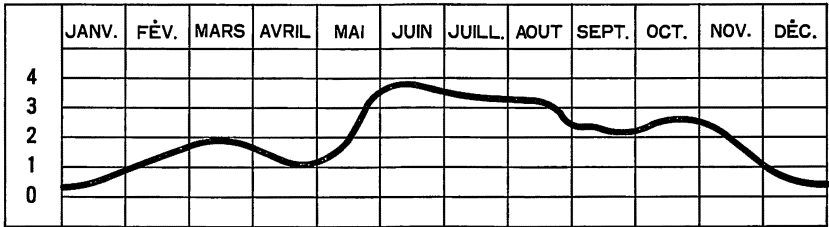
かれの「労働（の地理学）」の定義は至って簡単である。「われわれは開発とか生産とかの事実の問題になると、明らかに、人間が第1の位置を占めなければならなくなる。われわれが労働とよぶものは、人間によって造り上げられた地理的マティエール *matière géographique* である。それはしばしば受胎、豊かな合一 *union* である。」（Brunhes, 1926, 330）。

このように規定される「労働」は聊かわれわれの知る近代的な労働の概念とは異なってプリミティブですらある。事実『フランスの人文地理』第4部の内容はタイトルから想像されるのとは異なってきわめて民族学的である。今日的課題を取り上げるべき経済地理学の問題からは程遠く、その点から批判がなされるであろうが、前者の視点から見る限り興味深い内容となっている。「樹木と森林」、「狩猟と採集」、「漁撈」、農村における「労働と日々」が扱われている第4部前半部分（26—29章）は全く民族学的内容と言ってよい¹⁵⁾。後半部分（第30章以下36章まで）は農作物、牧畜、工芸作物、鉱業、エネルギーの地理学が取り上げられ、いわゆる「経済地理学」とよばれる内容に近いものになっているが、当時はすでに近代工業の時代であり、その問題が欠けており、そのことが先の指摘を如実に示している。以上のように『フランスの人文地理』の「労働の地理学」は「経済地理的」であるよりも「文化地理的」であり、後者の点では興味深い内容を豊富に備えている¹⁶⁾。

この「労働の地理学」の中でもっとも興味深いのは農業労働のリズムを取り扱った部分（第29章）である。農業労働を分類する場合、まず第一は生活様式によることが考えられる。生活様式は、ブリュンによれば、確かにドマンジョンが「農業経済」と呼ぶことを提唱した、すぐれて労働作業の結合形態である。しかしブリュンらはそれとは異なった、リズムに従った農業労働（作業）のサイクルの組織に基づいた、農民の「労働と日々」とも名付けられ得るような分類（法）を提案している。これは図2に示したように農業労働（作業）の



a) 耕種農業地域（リール地方——夏（小麦），秋（テンサイ）の収穫時に労働量を要する）



b) 牧畜農業地域（リモージュ地方——6月に最大労働量が必要）

図2 農業労働曲線（縦軸労働量，横軸月別）

強弱を曲線で現わし，グラフを描くものである。各地方はそれぞれ特徴的なカーブを描いている（Brunhes, 1926, 415）。さらに家畜飼養にもリズムがあり，そこでは家畜市場の開催時期が家畜の移動が行われる季節としてとくに重要である（Brunhes, 1926, 419）

農業労働のリズムに歓喜のリズムが結びつく事はよく知られている。各種の作物に結びついた祭り「農業祭」がそれであり，また伝統的な地域の「遊び」がある。後者は儀礼ようになっており，それぞれの地方は景観による区分と同じように「遊び」によっても区別されるという（Brunhes, 1926, 423）。

このようにブリュン・ドフォンテーヌの「労働の地理学」は，きわめて民族学的であるが，ブリュン自身とくに「民族学」には関心が深く（Brunhes, 1910a, 1913a, 1913b, 1925a），コレージュ・ド・フランスの講義やセミナーではデュルケームやモースなどがよく取り上げられたという¹⁷⁾（J.-Brunhes Delamarre, 1975, 72）。その方面の研究をドフォンテーヌが発展させたといえる。

2. 歴史の地理学—社会地理学と政治地理学

ブリューンは初めて人文地理学の本質的事実を分類、系列化した時、「地表において集団として生活している人間存在に係わる事実」を扱う分野を「社会地理学」と名づけ、さらにそこにおいて「人間集団の共存に基づく事実」、すなわち「集団間の関係」を問題とする分野を「歴史・政治地理学」と呼んだ (Brunhes, 1906a)。その後著わされた『人文地理学』において人文地理学の全体プランが示されたが、そこでは大きく2部に分け、第1部がいわゆる(固有の意味の)「人文地理学」が当てられ、第2部の「歴史の地理学」には人口、経済、政治、文明の地理学が配された。また後年カミーユ・ヴァローとの共著として著わされた大著『歴史の地理学』(1921)の構成は、大きく2つに分けていると見ることができ、前半は前著『人文地理学』から残された部分、すなわち「社会地理学」の分野にあたり、後半部分が「政治地理学」にあたる。従って彼の「歴史(の)地理学」という表現は必ずしも一貫している訳ではないが、居住、生産(労働)に係わるような分野を除いた、先の4系列でいえば、第3、第4系列の事実が含まれる場合と後者のみを指す場合とがある。ここでは一応最も初期の分類に基づいて、両者を分けて考察しよう。まず社会地理学についてである。

1) 社会地理学

ブリューンは『人文地理学』の中でル・プレーやその弟子たちによる「社会類型」やその類型の場所(立地)についての大きな貢献を究極的には社会地理学といってよいとしているが (Brunhes, 1925a, 783)、彼のこの作品は(パッチェイマーやベルドゥラーがいうように)ル・プレー派の経験主義的方法を用いて人文地理的事実を分類整理したものといえよう (Buttimer, 1971; Berdoulay, 1981)。

ブリューンがコレージュ・ド・フランス教授就任に際してとくに強調していることは、この人文地理的事実の複雑な性格についてである。そのひとつは人文地理的事実が社会問題を包含していることからくるのであり、その人文地理的事実の分析には社会的事実が不可欠であると社会地理的視点を重視している

(Brunhes, 1913a, 22-23)。

社会地理学の問題がまとめて取り上げられたのはカミーユ・ヴァローとの共著である『歴史の地理学』においてである (Brunhes, 1921)。その3章から6章にかけて、ブリュンは人間集団を社会地理学的に取上げようとする。その第3章「社会地理学の基礎」ではすでにこれまでの論文、著書において主張されてきた人文地理的事実のもつ基本的性格が論述されている。すなわち、(1)人文地理的事実における「社会的秩序 (事実)」, (2)人文地理的事実の「統計係数的性格」さらに(3)人文地理的事実を規定する「心理的事実」の重要性がそれである。

(1)の視点は、地理学者が一般的結合性を表明する場合、ただ単に民族学者や歴史家さらに統計学者の諸結果に頼っているだけではいけないのであって、かれらより一步先んじなければならないとされる。そのために人文地理的事実の分析にあっては、単に経済的事実 (秩序) の問題だけでなく、社会的事実 (秩序) の問題があることに注目すべきであるという (Brunhes, 1921, 42)。(2), (3)の問題は人文地理学全体の方法論的問題であり、次節で取り上げることにしよう。

ブリュンが以上のような社会地理的事実を自ら研究している例は必ずしも多くはないが、そのひとつとして、まず学位論文の『灌漑』における「水 (分配) の組織」を上げることができよう¹⁸⁾。また『人文地理学』においては、今日の都市社会地理学において重要な問題のひとつである都市の地域分化について指摘している。そしてそれが単に分化した地区の併存という事ではなく、それがしばしば地区の住民間の敵意、対立となることを指摘している (Brunhes, 1925a, 798)。厳密にはこの都市内の地域分化の問題とは言い得ないが、『フランスの人文地理』の第3部にパリにおける地方からの移住者の職業上特化による社会地区分化の例が上げられている。たとえばサヴォアからの暖炉職人、煙突掃除人、かつぎ人夫。オーヴェルニュからの薪商人、ぶどう酒商人という人たちで、これらの地方出身者の多くは互いに近くに住んでいるのがそれである (Brunhes, 1926, 47)。

ジャン・ブリューン人文地理学の方法

次節で「歴史の地理学」を問題にすることになるが、「歴史の地理学」と「社会地理学」とはどのような関係にあるのだろうか。ブリューンによれば、全体として「歴史の地理学」は本質的に立地上の事実、地域的事実を考察するものであるのに対して、「社会地理学」はこれこれの占拠様式から人間が受ける一般的影響を取り出そうとするものである。すなわち「歴史の地理学」がローカルな、地域的な、あるいは国家的な特徴を説明しようという方向性をもつのに対して、「社会地理学」はローカルな多様性からは独立したところで結論を見出そうとしているといい得る。従って、もし将来達成せられることがあるとすれば、一般人文地理学はこの「社会地理学」の方向によって達成されようという (Brunhes, 1925a, 829)。

2) 政治地理学

「歴史の地理学」を構成する第2の分野は「政治地理学」である。この分野の仕事がコレージュ・ド・ラ・フランス時代のブリューンの第2の大きな仕事であったことは『人文地理学』やコレージュ・ド・フランス開講講演で示唆されていたが¹⁹⁾、事実コレージュ・ド・フランス第2年度の講義として「歴史の地理学」がなされている (Brunhes, 1915)。このときの (さらにそれ以降の) 講義が後の大著の骨組をなしていることはこの講義の序論として書かれた同名の論文内容から推察することができる。それは彼の学学生涯の後半生の成果をなすものであった。

『歴史の地理学—陸海上における平和と戦争の地理学』(1921)は上述のようにカミーユ・ヴァローとの共著である²⁰⁾。政治地理学の内容をもつ第7章から10章までの4章はこの本の中心部分と言ってよい。「国家と国土」, 「国家と道路と国境」, 「国家と首都」, さらに「地域主義・連邦主義・国家連合」などの問題がそれぞれ1章ずつ当てられている。政治地理学の基本となる考え方は土地が政治的社会, 国家の存在にとって不可欠のものであるということである (Brunhes, 1915, 35)。一片の土地や羊の群に忠実であるとする人間は宗教意識や国家意識すら変えてしまうことができるのである。ブリューンはポマークのイスラム教徒が一時 (1912—13年から14年まで) ブルガリアの恐怖ある

いはブルガリアの圧力によってギリシャ正教に移行した事実を指摘している (Brunhes, 1921, 58)。

国家形成にとっての本原的条件はこの「土地」に加えてそこに集合する「人間」がなければならない。その場合、多様性に富んだ土地、自然条件だけでなく生活様式、人種、家族や社会制度の多様性をもつような土地が国家形成にとって優れた土地条件となると、ブリュンとヴァローはいう (Brunhes, 1921, 286)。しかし多様性に富んだ「土地」、 「人間」だけで国家形成を論ずることはできない。国家は、ラッツェルが言うように、孤立しては存在しておらず、対立の中にあるからその位置 position の地理的観念が重要な役割をもってくる。その位置とは「ただ地球上の決った地域における場所から引き出された国家の個々の場所を指定するものではない。それはお互隣接するもの、あるいは遠方に存在するもの同士の関係によって決ってくる」 (Brunhes, 1921, 280) という相対的位置概念である。そのことから「接触地帯」、 「分化地帯」における生き生きした力の作用、国家形成が論じられることになる (Brunhes, 1921, 296)²¹⁾。国家はさらにそれを構成している各部分の内的凝集力と周辺に支配力を確立して始めて国家の安全を確保できる。これらは明白なふたつの機能であり、各々地理的表現をとる。前者が道路、後者は国境である (Brunhes, 1921, 329)。以上のように内容的にはラッツェルの政治地理学の影響が色濃くみられる。

国土の区分の仕方からみて国家形態には中央集権制と連邦制がある。前者は地域主義と対立するものであるが、ブリュン、ヴァローはヴィダルと同様地域主義者であり、地域主義の利点としてコミュニケーションの早さと多重性 multiplication を上げ、地域主義の考えは労働と交換の合理的配分の考え方にも一致するという (Brunhes, 1921, 411)。

『歴史の地理学』第2部は「現代闘争の地理学」と題され、人種、国籍、民族、国家、戦争、平和の諸問題が論じられている。この部分はブリュンがコレージュ・ド・フランスの開講講義において触れ、その後の講義で取り上げられ、また『人文地理学』(1925)にも収録された、第1次大戦直前、第1次大

戦の引金となったバルカン半島の政治地理に続く内容のものであり、第1次大戦とその後の問題が取り上げられている²²⁾。本書の副題にあるように、戦争(第1次大戦)そのものを地理学の対象とした、まさに『戦争と平和の地理学』にあたる部分である。「陸上の戦争」(11章)、「海上の戦争」(12章)はそれぞれ具体的な戦争を事例に記述されている。われわれにとって興味深く思われるのはこうした「戦争の地理学」よりも「人種」、「民族」、「国家」などを扱った章(14章以下)である。

「人種」は確かな物質的实在であり、個人や集団にその特徴が現れること。しかしそれを絶対的な客観的实在として人文地理的事実と見ることは誤りであること。「人種」は歴史が造るものであり、つねに未来にあるものであると指摘する(Brunhes, 1921, 596)。

またジャック・アンセルがいうように、nationalité と nation の使い方はブリューン独自のものであるが(Ansel, 1922, 512-3)、「民族 natinalité」は人間集団によって構成されるもので、その凝集性は血液、言語、宗教などの(ときには3つの一緒の)共同性 communauté から生まれる。それに対して、「国民 nation」は固有の国土の上に確立される(Brunhes, 1921, 599)。だから「ベルギー国民とは言うが、ベルギー民族とは言わない」(Brunhes, 1921, 611)のはそのためである。

このようにしてブリューン、ヴァローは「人間凝集化」の視点から、まず政治的、地理的枠組みである「民族、人種」、それらを超えるものとしての「国家」、さらにそれらを(包括するもの)を超えるものとして「国際連盟 Société des Nations」を階層的に位置付け、経済、社会の視点から世界の均衡を図ることを期待したのである(Brunhes, 1921, 668)。

IV 方 法

1. モノグラフィー的方法と比較法

ブリューンは上記のように、増大する複合性によって人文地理的事実を分類

してきたが、それらを研究する場合、地理学においても、他の科学と同じように単純なものから複雑なものへ進む必要のあること説いている。たとえば国家全体をアプローチする前に地方（州）を観察すべきであり、地方の前に、都市や村や家屋そして道路から始める如きである（Brunhes, 1925a, 751）。最初に研究に着手さるべき「単純なもの」とは物質的事実であり、「目に見える、写真に撮りうる」ものである。たとえば小都市あるいは巨大都市を研究する前にそれらを構成する家屋や道路から始めるのである。そして多様性、進歩、複雑な現象の中に物質的事実を追求していきながら、経済地理学、社会地理学、政治地理学の高度な諸問題にたち至るのである（Brunhes, 1925a, 279）。この方法はデュルケームやデュルケーム派のひとびとが主張し、採用した方法である。ブリュンはかれのいう複合性の増大、すなわち具象的問題から抽象的問題への方法を取りながら、『人文地理学』の第1巻で3グループ、6類型の人文地理的事実を分析した後、第2巻ではそれぞれのグループや類型の諸事実が相互に関連している状態を、ブリュンが《島 îles》と呼ぶところの「小さな自然的単位」において総合的に把握を行なっている。したがって『人文地理学』第2巻は第1巻でえられた分析的な結果を小さな場において総合化している²⁹⁾。こうしてブリュンは海、砂漠、森林、そして山地の《島々》を具体的例とした詳細なモノグラフィーにまとめている。

ブリュンのモノグラフィー的方法ははやく学位論文の『灌漑』においてみられる。かれが対象としたスペイン、北アフリカの3地域は砂漠的な乾燥地域であり、そこで水を巡って行なわれている制度を「島の制度」に喩えたのである。ブリュンにおける「水と島」というテーマに定着と流動の二元性に対する関心からくる隠喩の存在を指摘するのはアン＝マリー・ロビックである（Robic, 1988）。彼女は《島》という《小宇宙》においてブリュンの関心である定着と流動を捉える認識論的方法が潜んでいることを指摘する。《島》という《小宇宙》は第一に全体（性）を捉えることが可能であること、第二に孤立化が可能であることが指摘される。ロビックによるとブリュンは第2の方法によって上記の人文地理学の課題に答えんとしたのである。またこの第2

の方法，すなわち孤立化の方法は比較によって，一般化への方向を示すもので，ブリュンにはヴィダルの方法とは異なった方向性をもっていた。このことはやくジュール・シオンがブリュンの『人文地理学』の書評の中で指摘している (Sion, 1925, 141)。

ブリュンはモノグラフィー的方法について独特な見解をとっている。かれは人文地理学の課題である「人文地理的諸事実のさまざまな類型と人間活動の地表への表出との間の結合がどのように成立しているか」を知るためには総合的なモノグラフィーが優れていることを顕揚する。しかしその総合的モノグラフィーは特定地域のモノグラフで終わるものではない。この「経験的」な方法は類型として選ばれた「見本」を研究することによって上の関係を解き解すことができるのである。したがってブリュンのモノグラフィーは比較，一般化を前提としたモノグラフィー研究であることに注意すべきである (Brunhes, 1925a, 752)。かれの学位論文『灌漑』はその具体例を示したとあってよい。地中海をとりまく3つの地域— 1) スペイン， 2) アルジェリア・チュニジア， 3) エジプトが比較地理学的研究の必要条件を満たしてくれるとして研究対象に選定されている (Brunhes, 1902a, 9)。

この方法は逆に言えば，いわゆる「モノグラフィー的方法」に対するブリュンの批判でもある (Robic, 1988)。「私はひとつのテーマ，類似した地帯の事実の同じテーマを研究することに専念した。ひとつの地理的研究は一地方が舞台であるあらゆる自然的事実の百科全書的研究に立ち向かわなければならないであろうか？あるいは他の観察科学のように，事実を系統的にそして真に比較可能な事実を比較することから始めることは愚かなことであろうか？大変複雑な人文地理学の領域において，この方法はこの複雑さ故に一層必要である。同一のタイプの自然地帯に生じた事実の比較研究によって，またこの研究によってのみ，自然条件と現実に結びついている人間的事実とこれから (自然条件から) 独立している事実とを正確に識別することを期待できるのである。」 (Brunhes, 1902a, 429)。

2. 地理的認識の問題

上述してきた人文地理的事実が統計的性質をもつというブリューンの指摘は人文地理学認識論上の諸問題を提起することになる (Brunhes, 1900e, 1913a)。このことからブリューンが言おうとしているのは、地理学においては例外的な事実が問題なのではなく、一般的事実あるいは平均的なものが問題とされるということである。「一般的事実」とか「平均値」とかは観察された事実に対して統計的処理によっていえることであり、一般性を論ずる時不可欠な重要性をもつということである (Brunhes, 1913a, 24)²⁴⁾。

ブリューンによれば、「人文地理的事実は—それがどのように奇妙なものであっても—、われわれが統計的係数を認識し、評価できたときはじめて、その科学的与件の完全な意味を獲得するものである」(Brunhes, 1913a, 25; 1921, 50)。以上の問題は次のような学問の本質の問題に係わる。ブリューンは「自然的枠組みと人間活動の結合に関するあらゆる真理は近似的にしかあり得ないと言えよう。……事実の真理について語ることは奇妙な言葉の誤用である。事実というのは大きさもち、色があり、時間があるのであって、真理がある(をもつ)のではない」(Brunhes, 1913a, 26-27)という。ブリューンによれば「事実についてそれが誤りである、あるいは正しいということはその事実に対する知覚によるのであり、事実が正しいかどうかは判断によるというのである。科学というのはわれわれが諸事実の間に確立する関係についてしかあり得ないのである。しこうして、科学的真理はその性質によって、われわれがここで人文地理学的真理と呼ぶものに多少とも高い程度に類似している。」そしてこの客観的真理の正しい意味は、ブリューンによれば、確率計算に基づいているという。ブリューンは数学者エミール・ボレルの名を上げ、地理学者も大いにかれの確率論を読み、熟考すべきことを勧めている (Brunhes, 1913a, 27)。ブリューンはさらに生理学や植物地理学で真理とよぶのは統計的真理であり、人文地理学で結合性について語る場合も同じであろうという (Brunhes, 1921, 57)。

ここでブリューンが述べている科学論は今日においても大変興味深いものである。科学が関係においてしか成立しないこと、および科学的あるいは客観的

真理は確率的にしかいえないとする観点は注目すべきであると思う²⁵⁾。

3. 心理的事実

ブリュンの名と切り離せない人文地理学上の大問題はいわゆる「心理的事実」の問題であり、ブリュンがそれをどのように考えていたのかまたそれをどのように解釈するかという問題である。

ブリュン自身地理学における心理的事実をどのように問題にしていたかを、繁を厭わずまずかれの文章に依りながら検討して行こう。

はやくもブリュンは学位論文のための灌漑研究においてこの問題に直面している。「このような（砂漠のような水の不安定な）地理的条件においては人間は当然固定した法によって共通利害を結びつけて、不確実や不安という心理的状态から逃れようとする。かれらは規則制定とか管理組織とかによって正常で、平和な状態を確保しようと努める」。また「集団の規則というものは自然条件の影響によって直接決められるものではなく、自然条件によって規定される精神状態そのものから生まれた結果である。そしてもし不規則で、その不規則性によって個人を脅かすこれら自然条件と不安な心理状態との間に必然的關係が存在するとしても、この心理的事実としばしばそこから生じる経済的諸結果との間には同一の必然の關係が存在するわけではない。人間はこの不安から逃れることができないしあるいは逃れることをためらい、逃れることを放棄することもありうることを忘れてはならない」（Brunhes, 1902a, 433）という。さらに「われわれは不規則な自然条件と耕作者の精神の一般的状态との間に必然的關係があると述べた。この關係は必然である。しかしこの關係は密接に…各個人が意識するにしろ、しないにしろ、各個人がもっている欲求の性格に依存しているのである。」だから同じ乾燥地域である人は農耕を選び、別のある人は牧畜を選ぶことになるのだと言う（Brunhes, 1902a, 434）。かくしてかれが3つの地域から得た結果は次のような結論であった。「それが何であれ、これこれの自然条件が人間集団の精神に生み出させる一般的心理的作用は自然と経済的事実の間に必然的な媒介の役割を演じている。もしこの關係が人間活

動の視点から諸事実の結合を分類することを可能にする本質的基準であるなら、まずもってこの作用を認識するよう取掛からねばならない。然るにこの作用が常に同じ自然的原因によって規定されているという保証はなんら無い。むしろ逆に異なった自然的条件が人間活動の類似した形態を生み出し得るということを示したのである。」(Brunhes, 1902a, 435)。

ここで問題としている心理的事実の問題はきわめて具体的であり、その説明には説得力があるように思われる。その後かれが概論的論文や著書において取り上げる例は、たとえば今日では詩情をそそる景観となっているが、地理学的には一見奇妙に見える地中海地方の丘上集落や石炭利用についての事例である。前者の場合、その説明には歴史的、経済的、あるいは社会的事実からでは不十分で、偵察と防御に優れた地点を選択した当時の人々の集合的心理的事実に求めねばならないとする。またよく例に上げられる後者の場合も、心理的次元から説明される。このようにブリュンにとって、人間の心理的要素は地理的事実の源となるものであり、自然と人間との間を媒介するものであり、社会的、歴史的、政治的諸結果はその後に生じるものなのであると考えられた(Brunhes, 1906a, 568)。

心理的結合—これは常に変化して止まないものであるが—は自然地理的諸現象と物質的な人文地理の諸事実、或いは後者と社会的、政治的、軍事的行政的地理学の諸事実間の結合関係と見做された(Brunhes, 1906a, 571)。人間の心理的要素は地理的事実の根源にあって、自然と人間との間の不可欠な媒介物であり、アンリ・ベルクソンの一般的な表現によれば「注意の方向 *la direction de l'attention*」とよばれるものにあたるという(Brunhes, 1925a, 883)。それは人間の意志を反映し、追求する方向性を意味するものである(Brunhes, 1921, 65)。かれは「心理的事実」を問題にするのは自然地理的な虚偽の決定論に対するアンチテーゼであることを強調し(Brunhes, 1913a, 32)、人間と自然との関係において最終的にイニシアティブをとるのは前者であり、人間の意志である、とした。しかし「どの程度精神的調整力は物質的調整力と関係しているのか、またどの程度物質的調整力は精神的調整力を引き起こ

すのか。これが問題であり、これは地理的公式の下で提起されるのである」(Brunhes, 1913a, 40) というのがかれの結論である。ブリュンが取り上げるベルクソンの「注意の方向」とはそのように理解すべきである。

これに対してわが国では飯塚浩二がブリュンの主張を心理的相対主義として批判していることについて上述した。確かに飯塚の言うように、たとえば石炭の利用に関して心理的問題よりまず歴史的、社会的条件が問題にされなければならないという指摘は正しい。しかしブリュンが人間—環境関係に「心理的事実」を介在させたのはもっと普遍的に、人間—環境関係を人間すなわち「精神」と環境すなわち「物質」との関係において捉えようとしたことからくると思われる。つまり人間存在は物質との係わりであるが、そこでは人間の心理—精神との係わりが問題となる。ベルクソンが「物質と精神」を問題としたときのその精神である。上述のようにブリュンが「心理的事実」を問題にするのは自然地理的な虚偽の決定論に対するアンチテーゼであることを主張し、人間と自然との関係において最終的にイニシアティブをとるのは前者、であり、人間の意志であることを強調したかったためと思われる。飯塚はそれによって地理学が「心理相対主義」に陥ることを恐れたが、逆にブリュンは『歴史の地理学』の研究が確立されなければならないのは心理的相対主義の基礎の上にある」(Brunhes, 1921, 69) ことを強調したのである。

ブリュンが人間—環境関係において心理的事実を介在さすべきだとして上げている例はきわめて陳腐な事例に過ぎないが、人間と自然との係わりにおいてまず問題にさるべきなのは人間の精神だという点ではブリュンに間違いはない。もの—自然が人間の生理、心理に与える影響を問題にするのでない限り、もの—自然と人間に係わる—認識するのは人間のところ—精神を通してであること、そのことは疑いの入れようのない事実である。ブリュンは人文地理学において人間—自然（環境）の係わりを問題とする限りこの立場（「心理的事実」の介在）をとることを主張したのである。だからかれが、人間—自然関係に心理的事実を介在させることが環境決定論のアンチテーゼといったのはそのことを意味している。しかし地理学の課題人間—自然関係を精神と物質

の関係として問題としていくとき、そこから地理学を出発させていくための認識論、方法論をブリュンは欠いていたように思われる。自然をどのように認識し、分析、総合していくかという認識論、方法論を欠いていた。ブリュンは真の科学は事実間の「関係」においてしか成立しないことを説いたが (Brunhes, 1913a), 事実とそれを認識するものとの間の関係を問うことはなかった。結局かれは人間の労働による地表の結果を問題にすることになったのである (Vidal de la Blache, 1911)。

橋本征治はブリュンの地理学が人類集団の基本的諸要求の充足のための物質的諸事象を取り扱う“基礎的人文地理”とこれら相互の連鎖事象からなり非物象的事象を取り扱う“歴史の地理”の二元論によって体系化されており、それらを相互に媒介するものとして「心理的要素」が構想されているとする (橋本, 1971, 1973)。この心理的要素は上の第一の人類の基本的ニーズの充足過程にあらわれる心理的作用とそれを補完し、あるいはその影響をうけて発生する諸ニーズの実現過程にあらわれる心理作用とがあり、橋本は前者を一次的ないし基本的 (心理的) 要素とよび、後者を二次的な (心理的) 要素とよんでいる。橋本は人間の行動を引き起こすさまざまなニーズがまず社会的に方向づけられ²⁶⁾、そのあと改めて自己のニーズと自然環境とを計り、自己の行為の目的完遂へと組織付けられると考え、後者の時点で心理作用が生じるという。橋本は人間の行動をまず社会的に方向付けられ、その上でつぎに心理的作用を受けるといふ。もしこの捉え方が正しいなら、ブリュンは何も心理的要素を持出す必要はなかったであろう²⁷⁾。

V ま と め

以上ブリュンの地理学をいささか冗長と思えるほどに述べてきたいまそれをまとめるのは屋上屋を架す嫌いがなくてもないが、師ヴィダルの地理学と比較しながら要約的に整理しておきたい。

- 1) ブリュンは地理学の課題を歴史 (学) と地理 (学) の相互関係および

地理的因子としての人間存在においた。そしてこの問題についてはヴィダル＝ド＝ラ＝ブラーシュが『フランス地理像』においてもっとも完全なモデルを示して呉れたといい、自分はこの師の忠実な弟子であることを宣言する (Brunhes, 1913a)。事実かれはヴィダルから地理学の啓示をえて地理学への道を選ぶことになったのであった。ブリュンの地理学の原理—「活動性」と「結合性」はヴィダルの「地的統一」の理念を力の作用とその結合に分けて示したものであって、全く同一の内容である。そして地理学の独自性を地表での諸力の結合を取り扱う科学とみる点でブリュンは師の地理学の原理をそのまま継承している。

2) つぎにブリュンは活動とその結合から人文地理学の対象を単純なものから複雑なものへ、1) 生存のための基本地理学、2) 土地開発の地理学、3) 社会地理学、4) 歴史・政治地理学の4系列(段階)に位置付け、さらにそれを具体的に研究するために1) 非生産的占拠、2) 動・植物的征服、3) 破壊経済の3グループ、それをそれぞれ2つずつ6タイプ(家屋・道路; 畑・家畜; 碎石場・鉱山)に分けて提示した。一般にブリュンの地理学は「目にみえる、写真に撮れるもの」といった「具体的なもの」と理解され、後者の3グループ、6タイプがかれの人文地理学の対象のように考えられている。かれの大著『人文地理学』の副題が人文地理学の実証的分類と名付けられ、それらの問題を専ら取上げていることが一層そのことを確からしくさせたが、実はそうではない。かれの仕事は第1系列、第2系列を取り扱った『人文地理学』(1910a/25a)と『フランスの人文地理』(1920a-26)、第3系列、第4系列を取り扱った『歴史の地理学』(1921)によって全体が示されているのである。ブリュンが人文地理学の対象を上記の3グループ、6タイプに分けたただけであったのなら、かれの実証的分類はクラヴェルのいうように論理的枠組みを欠いた人工的な分類に過ぎなかったであろう。ブリュンは不十分ながら人文地理学を単純なものから複雑なものへと系統的に考えようとしていたのである。この点ではブリュンの地理学はヴィダル地理学の漠然とした体系を系統的に分類整理したとみることができるであろう。

以上人文地理学の原理、対象においてはブリューンは師ヴィダルの地理学を継承しているといえる。しかしその方法においてはヴィダルの地理学を継承しつつも、独自の新たな展開を図っている。

3) ヴィダルは「地的統一」を地表面での部分、すなわちローカルな地域において捉えるモノグラフィーの方法を唱導した。一方ブリューンはローカルな地域を「島」と捉え、そこでの人文地理的事実を究明するモノグラフィーの方法を説いている。しかしかれの場合、そのモノグラフィーは特定地域の研究で終わるものではなく、類似の現象のみられる他地域との比較によって人文地理的事実（人間的事実と自然環境との関係）を解明し、一般的説明を目指すものであった。したがってブリューンは特定地域研究を目的としたモノグラフィーには批判的であった。この点にロビックらはブリューンにおいて、地域モノグラフィーを研究目的としていたヴィダル派との「異端」をみるわけである。

4) ヴィダルは人文地理学的事実は必然的關係によるよりも偶然的なものであることを強調して止まなかったが、ブリューンは科学をわれわれが諸事実の間に確立する関係であるとみ、科学的真理とは確率論的に言えるものという確固とした科学観をもっていた。

5) この科学観（認識論）が恐らくブリューンをして人間と自然の関係を研究課題とする地理学に「心理的事実」を介在させることになったと思われる。この「心理的事実」は人間と自然の根底にある精神と物質の関係に係わる問題である。ブリューンのいうベルクソンの「注意の方向」とは橋本のいうような社会的に方向づけられたものではなく、「生への注意」であり、人間の日常生活における自我の能動的な意識であると解すべきであろう。

ブリューンの思想をみる場合、宗教的信条とも結びつく実践的活動などにも触れるべきであるが、紙数の関係もあり、またすでにパッチェマー、ベルドゥレーなども触れているのでここでは省略した。

注

- 1) この論文はヴィダルがソルボンヌの教授になってから審査が行われたもので、名実ともにヴィダルの指導下で書かれた学位論文と考えられる。ブリュンはこの論文を *mon maître* としてヴィダルに献呈している。しかしロビックの最近の研究によると (Robic, 1988), どうもそう簡単にはいえないらしい。ロビックの調査によるとヴィダルはそのときの審査に加わっていないといわれる。その事情は知る由もないが、ブリュンの学位論文『灌漑』は後にいわゆるヴィダル派と学派の名をもって呼ばれ、その特徴とされる地域研究 (モノグラフィ) とはいささか異なったものであった。
- 2) 小寺廉吉氏からの聞き取り。マルトンヌ (Martonne, 1930) は *nécrologie* において、「彼の『人文地理学』を素朴な形態をしたすばらしい講話 (集) である。体系的な明白なプランをもち、諸関係を精彩な表現で捉え、要約し、単純化・定式化しており、専門家は留保をするが、素人大衆は魅惑される」(549-50) とか、「社会問題並びにカラー写真に熱心な人物に巡り合ったことがコレージュ・ド・フランスに招かれる契機となった」(552) とか皮肉っぽく書いている。ジャン・ブリュン＝デラマル (J.-Brunhes Delamarre, 1975) が父ブリュンと師ヴィダルとの間に良好な関係があったと強調し、それを裏付けようとするのも、裏返せば上の事実があったことを示しているであろう。
- 3) ハンノ・ベック (Hanno Beck) が *Grosse Geographen*, Dietrich Reimer Verlag, Berlin, 1982 の中で使用している (p. 180)。
- 4) カミーユ・ヴァロー Camille Vallaux, ジャック・アンセル Jacques Ancel, ピエール・ドフォンテーヌ Pierre Deffontaines らであり、ヴァローはブレスト Brest の海軍学校、ドフォンテーヌはバルセロナのフランス学院などで地理学の教鞭をとっていた。
- 5) ブリュンがラッツェルをはじめドイツ地理学の影響を受けたのは、パッティマーによれば、彼がスイスのフリブル大学に赴任したことが契機となっており、そこで彼はドイツ地理学から体系化を学んだという (Buttimer, 1971, 61)。
- 6) クラヴァルはまたブリュンが人類学の問題にも大に関心を示し、「伝播学派」*diffusionistes* による文化特性の分析方法を体系的に利用しているという (Claval & Nardy, 1968, 116)。
- 7) パッティマーによれば、ブリュンはベルクソンの影響を受け、人間にたいしてその意志を尊重し、人間を *homo faber* として捉えていた。(この思想はヴィダルにそのまま通じるものである。) しかしブリュンはヴィダルの伝統を尊重しつつも、異なった方向に進んだ。ル・プレー学派の経験論に拠りながら人文地理的事実の分類を試み、(ドイツ地理学の影響を受けながら) 系統地理学の方角に進んだこと、ラスキンの思想に共鳴しつつ社会的実践 (応用地理学) を行なったことなどを指摘している。
- 8) 小牧実繁, 巴里学事暦(十一)四一九二八—一九二九年一附, 巴里大学地理学的事,

『地理学』, 第3巻, 1936。

- 9) 小寺の私信による。小田内通敏, 『聚落と地理』, 1927; 今和次郎, 『日本の民家』, 1954 参照。
- 10) この書の第1巻の第1部「一般地理学: 変らない枠組みと人的因子」(1章から8章まで) はフリブール時代の弟子であるジラルダンとの共著になっている。また第2巻第4部の「労働の地理学: 経済, 社会地理学」はドフォンテヌとの共同執筆である。本書は上下2巻, 4部よりなる。第1部はフランスの「一般地理学」で, 人間生活の枠組みとしての自然環境(と人間生活)の一般的状況が取り上げられ, ジラルダンの執筆によるものである。第4章から8章(1920a, 105-258ページ)は「河川, 地形および都市」と題され, 各地域毎の地誌の概略である。記述は流域 bassins fluviaux を単位に河川の流れに沿って, それに沿う都市に簡単に触れるに留まっており, 旧来の地誌スタイル(ルクリュのそれ)のもの。
- 11) 「地理的精神」とはブリュンによれば次のとおりである。地理学者はつねに研究される現象がどこで生じているのかを正確に確認するよう努めねばならない。この場所への配慮は点とか地帯とかで表現された地図あるいは図式的表式によって示される(Brunhes, 1910a)。
- 12) ブリュンは北部地域(ロレーヌ地方)に南部型が浸入していることに関して, その地方が古くから交通と結びついていたという歴史性に説明を求めている。
- 13) 4輪と2輪の領域がはっきり分れている(Brunhes, 1926, 209)。
- 14) 西村孝彦氏の示唆による。回勅については岸ちづ子氏にお世話になった。また西村氏から J. Sion のブリュンに関する論文のコピーを頂戴した。併せて御礼申上げる。
- 15) アンドレ・ショレーは『フランスの人文地理』第2巻の書評において「労働の地理学」を評価しつつも, 27章の「狩猟」について, 古い生活様式の進化したものであるが, 今日では“近代的”スポーツではないのか, と述べている(Cholley, 1928)。
- 16) ひとつ森林と結びついた人間活動について紹介しておこう。フランスの各地の森には木材を利用する小さな仕事があった。その中でもっとも大きな木材職はモール地方のコルク職, リムザンの薪などであった。後者の薪取り人は干草の季節がやってくると, 収穫(手伝い)のため耕地に出掛けるのである。このようにして農業労働と森林労働の興味深い結合が見られたのであり, 冬の間仕事のない小農民にとって年間の労働を確保する貴重な労働であった(Brunhes, 1926, 350-352)。
また森林と結びついた工業として, 森林に燃料を依存した3つのタイプの工業—製鉄, ガラス, 製紙を上げることもできよう(Brunhes, 1926, 354)。しかしこれらの工業は燃料革命の結果必ずしも森林と結びつく必要がなくなった。
- 17) モーリス・ゼンメルマンは『人文地理学』の書評において, ブリュンが民族的な問題を排除しようとしていると批判している(Zimmermann, 1911)。ブリュンはこの批判は全くいわれのないものであり, 民族学に近いところにいるのは自分であるこ

とを強調している (Brunhes, 1911, 1913a, 20)。このことは以上述べてきたことから顔かれるであろう。なお、ブリュンは民族学と人文地理学の違いについて、後者が観察事実の空間的重要性と相互作用を重視する点にあるとしている (Brunhes, 1913a, 32)。

- 18) しかし、それは他の問題と切り離されて問題とされているのではなく、水という自然地理的問題が「水の組織」という社会組織をもって始めて、機能、維持されることを示している。
- 19) かれが現地を何度か視察した当時戦争の火種となっていたボスニア＝ヘルツゴビナを例に歴史的、政治的、文化的(宗教)地理学の問題を取り上げている (Brunhes, 1913a)。
- 20) 担当部分が明確に記されていないが、恐らく専攻分野との関係から言って、後半の政治地理学の部分はヴァローの執筆に係わるものであろう。内容的にはきわめて荒さの見える作品である。
- 21) ブリュンらはまた政治地理における「地理的拡張の法則」と「癒着の法則」を述べる。前者は地球上の活動的地域にみられる地理学の永遠の法則であり (Brunhes, 1921, 318)、後者はたとえばフランスにおいて原初的核であるイル・ド・フランスを中心にしてフランス国家が形成されて行ったような場合であり (Brunhes, 1921, 325)、いずれも(政治地理学の)一般法則であるといわれる。彼らはこれらを一般法則と呼んでいるがほとんど内容のない、(意味のない)法則のように思われる。
- 22) 執筆は恐らく書きっ振りからみてヴァローによるものだろう。
- 23) ブリュンのこの地理学の方法は一見マルクスの下向的、上向的方法に類似しているように見える。しかし、『人文地理学』第1巻の具体的な問題から複雑な問題を扱う方法は必ずしも具象から抽象へと高まっていく下向的方法というより対象が具象的な問題から抽象的問題へ高まって行くことを言っている。また第2巻の総合的な方法も得られた抽象概念によって具体的問題が説明されて行く上向的方法をとっているわけではない。
- 24) それはルヴッサールが言うように、統計数字(たとえば平均値)はひとつの抽象であるという欠点をもつが、この抽象化は事実とほぼ等しいものとし扱ってよいような現実である (Brunhes, 1913a, 25)。ロビックは1900e年の論文でブリュンが多様性の名の下に統計、とくに平均値の使用を批判しているというが (Robic, 1988, 37)、批判と言うよりは平均値のもつ意味に注意を喚起しているのであり、地理学における統計、平均値の使用を否定しているわけではない。ここでブリュンの1900eの論文のコピーを送って下さったロビック氏に感謝する。
- 25) なおこの文章は『歴史の地理学』(Brunhes, 1921)にもそのまま使われている。ただ“科学は関係においてしか存在しえない”というところが“科学は一般についてしかありえない”となっている。

- 26) 橋本はそれをベルクソンの「注意の方向」と呼んでであるが、それは誤解であろう。このように人間の行動について述べられたベルクソンのそれはもっと心理内在的なものである。
- 27) また橋本はブリューンの人文地理学の二元論体系が一次、二次の心理的要素に対応するといひ、基本的ニーズ→一次的心理作用→基礎的人文地理の諸事象→諸ニーズ→二次的心理作用→歴史の地理の基礎的諸事象と展開するとされるが、要は心理的作用の係わる位置が問題であり、上のように社会的方向付けのあとに位置付けるのであれば意味はない。

そして橋本によれば一次的、二次的という心理的要素が上述したブリューンの地理学体系の二分（二元論）に対応し、（方法論的に裏付けされた？）論理的体系が構想されていると考えている。しかしブリューンにおいては体系における二元性と心理的要素の理論的不備のため、彼の地理学体系（と方法）は成功しなかったと結論づけられている。

文 献

- 1) Jean BRUNHES の文献
- 1894-5 : Les irrigations dans la "région aride" des Etats-Unis, *Annales de Géographie*, 4, 12-29.
- 1897 a : Les irrigations en Egypte, *Annales de Géographie*, 6, 456-461.
- 1897 b : Principes de la géographie moderne, *La Quinzaine* 1^e et 16 sept. 1897, 21-38, 239-255.
- 1898 a : *Michelet*, Académie française prix d'éloquences, Perrin et C^{ie} Libraires-Editeurs. 63 pp.
- 1898 b : Sur quelques phénomènes d'érosion et de corrosion fluviales, *Comptes rendus hebdom. des Séances de l'Académie des Sciences*, 21 févr. 1898.
- 1899 a : Les grands travaux en cours d'exécution dans la Vallée du Nil, Réservoir d'Assouan et barrage d'Assiout, *Annales de Géographie*, 8, 242-251.
- 1899 b : Les marmites du barrage de la Maigrauge, avec six reproductions stéréoscopiques, *Bulletin de la Société fribourgeoise des Sciences naturelles*, 1899.
- 1900 a : L'orientation nouvelle du patronage, *Congrès international de la jeunesse ouvrière*.
- 1900 b : Introduction à "Impression d'un sans-travail", *La Quinzaine*, 16 sept. 1900.
- 1900 c : Les conséquences économiques et sociales de l'exploitaion de la houille, *Compte rendu de la Semaine sociale de Dijon*.
- 1900 d : La désorganisation de la famille ouvrière par le travail à domicile, *Compte rendu de la Semaine sociale de Dijon*.

- 1900 e : Différences psychologiques et pédagogiques entre la conception statistique et la conception géographique de la géographie économique, *Etudes géographiques*, 1, 45-107.
- 1900 f : La seconde édition de *l'Egyptian Irrigation* de M^r. W. Willcocks, *Annales de Géographie*, 9, 265-269.
- 1901 a : (avec Henriette Brunhes) *Ruskin et la Bible, pour servir à l'histoire d'une pensée*, Paris, Perrin, x-269 pp.
- 1901 b : Pour l'anniversaire de la mort de Ruskin, *La Quinzaine*, 38, 289-309.
- 1901 c : Les résultats géographiques de l'action de l'homme sur la nature d'après une étude récente du Professeur Woeikoff, *Bulletin de la Société fribourgeoise des Sciences naturelles*, 9.
- 1902 a : *L'irrigation, ses conditions géographiques, ses modes et son organisation dans la Péninsule ibérique et dans l'Afrique du Nord*, Paris, C. Naud, xx-580 pp.
- 1902 b : *De vorticum opera, seu quo modo et quatenus aquae currentes per vortices circumlatae ad terram exedendam operam navent*, Friburgi Helvetorum, 106 pp. (trad. française: Le travail des eaux courantes, la tactique des tourbillons, *Mémoires de la Société fribourgeoise des Sciences naturelles, Section géologie et géographie*, II, 4.)
- 1902 c : Les oasis du Souf et du M'zab comme types d'établissements humains, *La Géographie*, 5, 5-20, 175-193.
- 1902 d : Sur les marmites des îlots granitiques de la caracte d'Assouan, *Comptes rendus hebdom. de l'Académie des Sciences*, 7 août 1899.
- 1902 e : Sur le rôle des tourbillons dans l'érosion par le vent, *Comptes rendus hebdom. de l'Académie des Sciences*, 15 déc. 1902.
- 1903 a : Erosion tourbillonnaire éolienne, Contribution à l'étude de la morphologie désertique, *Memorie della Pontificia accademia romana dei Nuovi Lincei XIX*, 1903.
- 1903 b : Terre et terrain de l'histoire, *Revue de Fribourg*, juillet-août 1903.
- 1903 c : (avec L. Gobet) L'excursion glaciaire : synthèses des recherches et des idées de M. Peck, *La Géographie*, 15 déc. 1903.
- 1904 a : Friedrich Ratzel (1844-1904), *La Géographie*, 10, 103-108.
- 1904 b : (en collab. avec B. Brunhes) Les analogies des tourbillons atmosphériques et des tourbillons des cours d'eau et la question de la déviation des rivières vers la droite, *Annales de Géographie*, 13, 1-20.
- 1905 : L'irrigation en Egypte depuis l'achèvement du réservoir d'Assouan (1902), *La Géographie*, 11, 161-184.

- 1906 a : Une géographie nouvelle: la géographie humaine, *Revue des Deux Mondes*, 33, 543-574.
- 1906 b : (avec P. Girardin) Conceptions sociales et vues géographiques: la vie et l'œuvre d'Elisée Reclus (1830-1905), *Revue de Fribourg*, avril-mai, 1906, 274-287, 355-365.
- 1906 c : (avec P. Girardin) Les groupes d'habitation du Val d'Annivers comme types d'établissements humains, *Annales de Géographie*, 15, 329-352, photographies xviii-xxi.
- 1908 a : Une forme nouvelle du pouvoir économique des consommations: Les ligues sociales d'acheteurs, *Revue économique internationale*, 4^e trin, 291-323.
- 1908 b : Le travail à domicile et le consommateur, *Bulletin de la Ligue sociale d'Acheteurs*, 4^e trim. 1908.
- 1909 : Les limites de notre cage, *Le Correspondant*, 10 déc. 1909, 833-862.
- 1910 a : *La géographie humaine. Essai de la classification positive, principes et exemples*, Paris F. Alcan, 843 pp., 202 fig.
- 1910 b : Un fait essentiel de la géographie humaine: La maison, *Revue de Fribourg*, 416-434, 502-511. Extrait de "*La Géographie humaine*, 1910".
- 1910 c : Les pluies en Italie d'après Mr Filippo Eredia, *Annales de Géographie*, 19, 78-83.
- 1911 : Réponse à M. Zimmermann, *Annales de Géographie*, 20, 453-454.
- 1912 : *La géographie humaine. Essai de la classification positive, principes et exemples*, Paris, F. Alcan, 2^e édition, 2 volumes.
- 1913 a : Du caractère propre et du caractère complexe des faits de géographie humaine, *Annales de Géographie*, 22, 1-40.
- 1913 b : Ethnographie et géographie humaine, *L'Ethnographie*, Nouvelle série, 1, 29-40.
- 1915 : La géographie de l'histoire (Introduction à la seconde année du cours de géographie), *Revue de Géographie annuelle*, 8, 70 pp.
- 1917 : A propos de *La France de l'Est* de Vidal de la Blache, *Le Correspondant*, 10 nov. 1917, 467-481.
- 1920 a : *Géographie humaine de la France*, t. 1, *Géographie générale et géographie régionale*, Paris, Plon, 495 pp.
- 1920 b : *Human Geography. An Attempt at a Positive Classification, Principles and Examples*. Translated by I. C. Lecompte, Edited by I. Bowman and R. Elwood Dodge, Rand M^eNally & Company, 648 pp.
- 1921 : (en collab. avec C. Vallaux) *La géographie de l'histoire. Géographie de la*

ジャン・ブリュン人文地理学の方法

- paix et de la guerre sur terre et sur mer*, Paris, Félix Alcan, 716 pp.
- 1923 a : Les routes nouvelles de l'Annam au Laos, *Annales de Géographie*, 32, 426-450.
- 1923 b : Tableau-résumé de la vie économique du Japon, *Journal de la Marine marchande*, 13 sept. 1923.
- 1923 c : Double duo et duel des ports japonais: Yokohama-Tokyo-Kobe-Osaka, *Journal de la Marine marchande*, 6 sept. 1923.
- 1925 a : *La géographie humaine. Essai de la classification positive, principes et exemples*. 3^e édition, 3 volumes. 975 p., 278 fig.
- 1925 b : Human Geography, In H. E. Barnes (ed): *The History and Prospect of Social Science*, 55-105.
- 1926 : (en collab. avec P. Deffontaines) *Géographie humaine de la France, t. 2, Géographie politique et géographie du travail*, Paris, Plon, 652 pp.
- 1928 : Les responsabilités des sociétés chrétiennes vis-à-vis des peuples primitifs, *Compte rendu de la Semaine sociale de Strasbourg*.
- 1929 : (松尾俊郎抄訳) 人文地理学, 古今書院, 531 pp.
- 1930 : (en collab. avec M. J-B. Delamarre) *Races*, (Coll. Images du Monde), Paris, F. Didot, 96 pp.

2) Jean Brunhes の著作に対する書評

- Ancel, J. 1922 : La géographie de l'histoire, *La Géographie* 37, 493-516.
- Cholley, A. 1928 : La géographie politique et économique de la France d'après J. Brunhes et P. Deffontaines, *Annales de Géographie*, 37, 163-167.
- Clerget, P. 1906 : Les faits essentiels de la géographie humaine, *La Géographie*, 14, 120-123.
- Clerget, P. 1910 : La géographie humaine d'après M. Jean Brunhes, *La Géographie*, 22, 325-335.
- Dauzat, A. 1925 : Les conceptions géographiques de M. Jean Brunhes *La Nature*, 24 oct. 1925, 270-271.
- Deffontaines, P. 1926 : La géographie humaine de Jean Brunhes, *Annales de Géographie*, 35, 268-271.
- Févre, L. 1923 : Le problème de la géographie humaine. A propos d'ouvrages récents, *Revue de Synthèse historique*, 35, 97-116.
- Levainville, J. 1922 : La géographie de l'histoire, *Annales de Géographie*, 31, 496-500.
- Margeri, E. de 1921 : Une nouvelle géographie humaine de la France, *Annales de*

Géographie, 30, 379-383.

Robert, P. 1913 : Le progrès contemporain en géographie humaine, en sociologie, en histoire et l'antériorité des découvertes de la Science sociale, *La Science sociale*, 283 année.

Sion, J. 1925 : La géographie humaine de M. Jean Brunhes, *Bulletin de la Société languedocienne de Géographie*, 49, 138-143.

Vallaux, C. 1921 : Rivières, pays et maisons de France d'après Jean Brunhes, *La Géographie*, 35, 113-126.

Vidal de la Blache, P. 1902 : L'irrigation d'après Mr Jean Brunhes, *Annales de Géographie*, 11, 457-460.

Vidal de la Blache, P. 1911 : La géographie humaine par M. Jean Brunhes, *L'Académie des Sciences morales et politiques: Compte rendu*, 73, 117-120.

Zimmermann, M. 1911 : La géographie humaine d'après Jean Brunhes, *Annales de Géographie*, 20, 99-111.

3) Jean Brunhes について

Berdoulay, V. 1981 : *La formation de la l'école française de géographie (1870-1914)*, Bibliothèque Nationale, 245 pp.

Buttimer, A. New Horizons in the Work of Jean Brunhes, in "*Society and Milieu in the French Geographic Tradition*", Rand McNally and Company, 226 pp., 59-72.

Claval, P. 1964 : *Essai sur l'évolution de la géographie humaine*, Paris, Les Belles Lettres, 162 pp. 2^e éd., 1976, 201 pp.

Claval, P. 1984 : *Géographie humaine et économique contemporaine*. PUF, 442 pp.

Claval, P. et Nardy, J.-P. 1968 : *Pour le cinquantenaire de la mort de Paul Vidal de la Blache*, Paris, Les Belles Lettres, 130 pp.

Charléty, M. S. 1932 : *Notice sur la vie et les travaux de M. Jean Brunhes (1869-1930)*, Paris, Typographie de Firmin-Didot et C^{ie}, 25 pp.

Deffontaines, P. 1939 : Jean Brunhes, sa vie et sa pensée, I, L'Homme et son œuvre, in "*Problèmes de géographie humaine*, Paris, Bloud et Gay", 9-22.

Dickinson, R. E. 1969 : *The Makers of Modern Geography*, Routledge & Kegan Paul, 305 pp.

Febvre, L. 1922 : *La terre et l'évolution humaine : introduction géographique à l'histoire*, A. Michel, 427 pp.

J.-Brunhes Delamarre, M. 1939 : Jean Brunhes, sa vie et sa pensée, II, L'Histoire d'une pensée, in "*Problèmes de géographie humaine*," Paris, Bloud et Cay, 23-48.

ジャン・ブリューン人文地理学の方法

- J.-Brunhes Delamarre, M. 1975 : Jean Brunhes (1869-1930), *Bulletin de la Section de Géographie*, 81, 49-80.
- Lefèvre, F. 1929 : Une heure avec... Jean Brunhes, *Nouvelle Revue française*, 45-62.
- Martonne, E. de 1930 : Nécrologie: Jean Brunhes, *Annales de Géographie*, 34, 549-553.
- Meynier, A. 1969 : *Histoire de la pensée géographique en France*, PUF, 224 pp.
- Nicolas-Obadia, G. 1983 : *L'axiomatisation de la géographie: l'axiome chorologique*, Atelier national de reproduction des thèses, Université de Lille III, 601 pp.
- Robic, M.-C. 1988 : Les petits mondes de l'eau: le fluide et le fixe dans la méthode de Jean Brunhes, *L'Espace géographique*, 27, 31-42.
- Sion, J. 1930 : Jean Brunhes, *Rivista Geografica Italiana*, 37, 129-132.
- Taylor, G. 1951 : *Geography in the 20th Century*, Methuen, 674 pp.
- Vallaux, C. 1930 : Nécrologie: Jean Brunhes, *La Géographie*, 237-239.
- 橋本征治 1971 : ブリューンの人文地理学体系と方法—ブラーシュとの比較による批判と展望, 『史泉』, 42, 1-25.
- 橋本征治 1973 : 「社会」の地理学的研究の系譜—フランスの場合, 原弘二郎先生古稀記念『東西文化史論叢』, 199-224.
- 飯塚浩二 1950 : ブリューンにおける心理的相対主義について, 『人文地理学』(有斐閣), 76-89.
- 小牧実繁 1926 : ヴァロー氏の歴史地理学論(上, 下), 『歴史と地理』18, 291-300, 419-429.
- 小牧実繁 1931 : ブリューンの生涯とその学問, 『歴史と地理』, 28, 80-89.
- 小寺廉吉 1931 : ジャン・ブリューン教授の思い出, 『郷土』, 4, 96-105.